

イベント環境対策活動 Earth Care

8月15日～17日に石狩湾新港で行われた「RISING SUN ROCK FESTIVAL 2014 in EZO (以下RSR)」の会場で、環境対策活動を実施しました。RSRでの環境対策活動は今年で15回目を迎えました。全道・全国から約200名のボランティアスタッフが集まり、約6万人の来場者とともに会場でのごみを13種類に分別しました。

今年のテーマは『循環』。「From Festival To Your Lifestyle～石狩で感じる循環キャンペーン～」と題し、毎年恒例のごみの分別ナビゲート、オリジナルごみ袋の配布、キャンペーンブースの運営、オーガニックじゃがいもの配布の4つの活動に加えて、今年は初の試みとなる、石狩の木材で薪割りをするプログラム「みんなで薪割り」を展開。ブースには多くの来場者に足を運んでいただき、ロックフェスの会場で『循環』を体感していただきました。



大雪山国立公園旭岳自然保護プロジェクト

全8回の活動が終了しました！のべ160名のボランティアが旭岳自然保護監視員の方々と活動。登山者や散策者の方々のレクチャー、散策路の巡回や整備、簡易木道の設置、清掃登山などを行いました。今年は山岳部の学生や、環境の勉強をしている学生などが多く参加し自然保護への理解を深めました。



見えるおいしいリサイクル RSRオーガニックファーム

8～9月にかけてじゃがいもの収穫を行いました。今年収穫したじゃがいもは5品種合計で約3t。昨年比約10倍となりました。このじゃがいもはRSRで来場者に配布し、サポート会員にお届けしました。冬の初めまでは、今年のRSRで出た生ごみの堆肥化をすすめ、また来年に向けて堆肥を畑に入れる作業を行います。



未利用材の循環プロジェクト NINOMIYA

5月からの39回に及ぶ材出し・薪割りで、今年目標としていた50㎡(北海道で薪ストーブを利用している家庭約10軒分)の薪をつくることができました。現在は「コープ未来の森づくり基金」より助成をいただき、20名程度のボランティアとともに薪および薪ストーブに関するフリーペーパーを作成しています。



サイクルシェアサービス ポロクル

今年は約50名のクルーが現場運営に携わり、また商店街や警察と連携した自転車ルール・マナー啓発活動を展開しました。イベント『自転車day』では、のべ600人の市民の方が自転車ツアーやクイズに参加。10月末で今年の営業は終わりますが、運営会議など自転車を通じてまちを変える活動は続きます。



子どもとの関わりから 気がついたこと

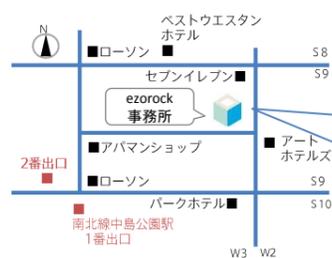
代表の小言

大学時代に子ども向けの沢登りの自然体験プログラムにボランティアとして参加したときのこと。沢登りといっても、腰まで浸かるくらいのもので、大人でも大変な場所です。その中でも一番の難所と言われたのが、岩と岩の間に大量の水が流れ込む場所でした。最初に私が登ってみせ、次に子どもたちの番。下からは、現場責任者(ディレクター)が見守っています。岩に手をかけて、激しい水流の中を必死に登って、くる子どもたち。そして、私も彼らを引っぱり上げようとして、上から手を差し伸べようとした。その瞬間、ディレクターが私に向かって大きな声で叫びました。「草野！この子が自分の力で登ろうとしているんだ！手を出さずじやない！」私は、あわてて手を引きました。

「介入する」ということが、相手のチャレンジする機会を奪ってしまう。そんな大切なことに気がついたことは、大きかったですね。

ふくしまキッズは、今年の冬も開催！ぜひボランティアにチャレンジしてみませんか？

草野 竹史



特集 ふくしまキッズ北海道ボランティア

2015年ラストイヤーへ
新たな可能性を
見据えて。

今月の写真
早朝のラジオ体操に起きてきた子どもたちと胸ヶ岳を眺める。
ふくしまキッズ夏期林間学校2014北海道プログラム大沼コースにて。



ふくしまキッズ 北海道ボランティア

2015年ラストイヤーへ 新たな可能性を見据えて。

ふくしまキッズは開始当時「5年間」の継続を約束していました。2015年の夏が最後のプログラムとなります。わたしたちはボランティアとして4年間、北海道プログラムに参加してきました。4年間で、なにが生まれ、これからの北海道と福島に、なにを残せるのか。今までとこれからは違います。

●自然の中で創造力を発揮する子どもたち

2011年の夏、定員の200名を大きく超える512名の子どものたちが、マスクをした姿で福島を離れてきました。「おじいちゃんの畑で手伝いをしたり山で遊ぶのが大好き。でも線量が高くてできない。久しぶりの自然を楽しむことができる。」「何ヶ月か野球の練習ができなかった。普通に練習できるのが幸せだと思った。」という状況でした。

さらに1・2年後になると、遊びに制限がある状況が当たり前になっている子どもたちが、遊び方がわからず戸惑っている姿も見受けられました。しかし、スタッフが川・森・湖など興味に合わせて遊びを選べる選択型プログラムや、自由に遊べる非構成的な時間を増やしていたこともあり、徐々に水たまりでの工事ごっこなど、子どもらしい創造性や主体性を発揮するようになりました。



3年目になると、教育的な価値に惹かれて子どもを送り出す保護者の方が増えました。初めて会った人に自分から関わっていったり、自分のことを自分でやったり。保護者の方々から「保養だけでなく、これから生きていく上で大事なことを学ぶことができる。」「子どもが変わった。」というメッセージをいただくようになりました。

そして、「大きくなったらふくしまキッズのボランティアをやりたい。」「勉強を頑張った困った人がいたら助けられるおとなになりたい。」等、子どもに感謝の気持ちが育つのもこの活動の特徴です。



●ボランティアにとっても成長の場

ふくしまキッズは若者にも影響を与えています。まず、今までボランティア活動と接点がなかった層の参加が増えました。体育会系の部活一筋、外で遊んだことがない、ボランティアを斜に構えて見てた。そういう人たちも、北海道でなら何かできるんじゃないか、子どもと遊ぶのが楽しそうだ等という理由で参加するようになりました。どんなきっかけであれ現場では全力で活動し、更にその後コアスタッフや支援者となる人も増えました。

また個々の変化も特筆すべきです。学校では教える人がいてどれだけ答えを覚えられるかが問われますが、ふくしまキッズでは自分の行動や周囲からどれだけ気付きを得て学びにするかという場です。

トライすればするほど、成功であれ失敗であれ、なにが手応えが返ってきます。失敗は経験値となり、次に繋げていけばPDCAサイクルをまわすことができます

また自分の成長だけでなく、子どもの可能性、自然の中での遊びの楽しさ、農山漁村とそこに住む人の魅力、多様な人の集まるチームでひとつのことを成す楽しさ・むずかしさを知る場になっています。同時に福島の実況を子どもの言葉や手紙からリアルに感じ、問題意識や関わり続ける責任感を持つようになっていきました。

●地域の受入担当スタッフとの協働

たくさんの若者が自然体験活動のボランティアをすることには想像以上に多くの壁がありました。自然が相手のため、人が何とかしてくれるというような指示待ちではられません。また子どもは一人ひとり違うので自分で考えて関わる必要があります。初めての現場でそれを理解して行動できるボランティアは多くありません。しかしそれについてからボランティア全員に伝えることも難しいことでした。

しかし活動回数を重ねるごとに、スタッフがボランティアへの任せどころを判断したり、工夫して伝えてくれるようになり、ボランティアは自然体験活動の現場の価値観を理解・共感し、スキルも身につけてきました。スタッフと若者が苦労しながら少しずつ歩み寄ってきた結果だと思えます。

●”学びの大地”北海道へ

社会人になっても形を変えて参加し続けたり、函館や旭川でも日常的に活動をするグループができたり、地域への就職に繋がったりと新しい可能性が広がっています。

今、北海道には自然体験活動ができるフィールド、プロのスタッフ、プログラムに加えて、それを支えるボランティアが増えています。この培った資源を生かして「いつでも福島やこの経験を必要としている日本中の子どもたちを受け入れられる」「若い人たちにとって成長の場がある」という、学びの大地・北海道をつくる一部を担えたらと思えます。



interview

全10回の活動を通して見えてきたこと。ボランティアからコーディネーターへ

●大学卒業後、ふくしまキッズの現場へ

大学卒業後の2011年夏、ふくしまキッズのスタッフを探していることを知り、「この活動は今後自分にとっても北海道にとっても大切な活動になる」と考えて参加した。しかしその1年目は、失敗の連続だったようだ。担当したのは本部で約250人のボランティアの受け入れ。

「日々入れ替わるボランティアを子どもの班に配属し指示をしたり、同時にこれからくるボランティアを全道各地へふりわけて連絡をしていく。他にもたくさんやることもあり、日々目の前のことをやるだけで精一杯。ボランティアにも疲れや不満が溜まってきてしまい…全力を出し切ったけれど結果は散々でした(笑)」それでも自分ができることとできないことを把握できたこの1か月は大きな経験になった。ボランティアマネジメントを学びたいとその次の冬・春のふくしまキッズではezorock代表の草野とともに活動して経験を積んだ。

同時に「北海道各地の農村で、これからの担う若者が育ち、受け入れる地域も課題解決につながるようなボランティアプログラムをつくりたい」という目標に向けて、ふくしまキッズ以外でも農山村で自然保護やイベントサポートなどに取り組むボランティアプログラムをおこなった。思いを理解して受け入れてくれる団体が増えた。これらはまさに、地域に貢献しながら、若者が成長できる場だ。

●道外の若者にも参加して欲しい！

3年間ボランティアマネジメントをして、若者と社会人の大きなギャップに気付いた。「お互い当たり前と思うことがまったく違っていた。だから多くの社会人は学生の成長に興味がなく、学生は社会に出ていくことを恐れている。でもその間に立つ人がいれば、若者がモチベーションの高さ、パワー、いるだけで場が明るくなるような存在感などの強みを生かして地域に貢献できるのではないか。今はまず、このプログラムを安定して提供できるように、増やしたり、道内だけでなく道外からも参加できるようにしたり、色々な若者にこの機会を提供したい」



高橋 苗七子(たかはし ななこ)



1988年旭川生まれ。宇都宮大学国際学部卒業。在学時より栃木や北海道のNPOで活動し、卒業後すぐに岩手県釜石市へのボランティア派遣やふくしまキッズ北海道プログラムにボランティア担当として携わる。2014年よりNPO法人ezorock事務局スタッフ。



message

●豊かな体験から希望が見えてくる

子ども達が見えない放射線の不安がつる暮らしてから一時解放され、子どもらしさを取り戻し、心豊かに育つように応援する関わりをこれまで構築してきました。たくさんの心温かいボランティアと関わりながら、子ども達はぐんぐん成長しています。そのふくしまキッズは来年の夏でピリオドを打ち、次はジャパンキッズへとギャチェンジします。福島の子もだけでなく、全国の子もたちが北海道で豊かな体験をすることで、感動したり、新たなことに気づいたり…。今の時代だからこそ必要なことだと感じています。そこに向かい今後さらなるボランティアパワーが求められます。これからもよろしくお祈いします。(ふくしまキッズ実行委員長/NPO法人あぶくまエヌエスネット 進士 徹)

●自然体験活動を仕事にしていくチームになれそうな気がします

ボランティアの、特に学生の皆さんは、この活動に「地域づくり」とか「農村漁村の活性化への寄与」という要素があるとは想像できなかったことでしょう。子どもが北海道の田舎に入り込み、皆さんと遊ぶことが、地域を活性化し、多大なる恩恵をもたらす。この4年で多くのボランティアの皆さんがそのことに気付いたことは大きな成果だと思うし、はっきり言ってチャンスです。自然体験活動は子どもだけでなく、地域や関わる人にも学びがある。つまり、子どもの自然体験活動は、北海道を、世界を救うのですよ。問題はそこから。そんな素敵な活動を発展させていくためには、「仕事」にしていかなければいけません。ふくしまキッズで出会った皆さんとは、そんな課題にチャレンジできるチームになれそうな気がします。(北海道プログラム統括/NPO法人ねおす いぶり自然学校 上田 融)

●前向きな姿勢とひたむきな眼差しに刺激されています

さまざまな個性の子どもたちと接していく中で自分自身の課題を見つけ、それに向かっていくボランティアのみならず。悩むこともたくさんあるけど、自分の強みや弱みを発見できるチャンスでもあります。決して一人ではなく、ボランティア同士高め合い、先輩たちが相談に乗りアドバイスをくれる。大人も子どもも個性がぶつかり合う中でその自己表現は、とてもエネルギーをつかいますが、その一歩が自分や子どもたちの世界に豊かな広がりを持たせるのです。彼らのいつも前向きな姿勢とひたむきな眼差しから自分が一番刺激ももらっています。(北海道プログラム大沼コース ディレクターNPO法人ねおす 札幌まるやま自然学校 高野 克也)



ふくしまキッズとは

福島県在住の子どもを対象に、夏、春の長期休暇に行われる宿泊型の自然体験活動。全国各地で行われている。主催はふくしまキッズ実行委員会。活動の目的は、「福島第一原発事故問題の影響を受けている子どもたちの健全育成と学ぶ権利を支援すること」、「民間団体、企業、広範な市民の協力関係を作り出し、共助を基本とした社会を作り出すことを目的とし、行政と連携して活動を進めていくこと。北海道プログラムはNPO法人ねおすなどが各地域プログラムを担当しezorockでは、ボランティアが足りない地域へのボランティア募集・派遣を実施。

●これまで参加した子供の数:1940人 ●活動回数:10回 ●受け入れ地域:26か所